

氏 名	ろ 盧 きよん 京 ひ 姫
-----	---------------------

(論文内容の要旨)

本論文は、17世紀前半における明と朝鮮の文学交流及び朝鮮文壇における明文学受容の方式、またそれによって行われた朝鮮漢詩への認識の変化について考察することを目的としている。特に本論文では、この三つが相互に連繫していることに注目し、その関係を明らかにすることに主眼をおいた。その結果、この時期の明と朝鮮との文学交流が一方的な文化の伝播と受容ではなく、互いの文学に対する関心に基づいて進行した「双方向的」交流であったことを確認した。また朝鮮文壇の明文学受容も無条件的な受容ではなく、既存の朝鮮文壇の伝統に合わせて批判的かつ独自の方式で行われたものであることを明らかにしたのである。

最終的には、以上の交流と受容によって朝鮮文人が朝鮮の漢詩を振り返り、その価値を改めて認識するようになったことを論じた。以上の結論に至るまでに、まず両国間の文学交流に関わった文人たちの交遊、交流の経路など、文学周辺部のことに注目し、当時の文化交流の具体的様相を把握しようとした。また明文学の受容に関連して、書籍の流入と再編纂の過程を追跡し、朝鮮文壇が明文学を受容するにあたって、批判的観点に基づき、取捨選択しつつ取り入れていった様子を考察することを目指した。

本論文の研究対象は大きく三つの部分に分けられる。すなわち、第一に17世紀前半に行われた明・朝鮮間の文学交流の具体的様相について、第二に朝鮮文壇における明文学の批判的受容方式について、第三に、それに基づいて現れた朝鮮漢詩に関する認識の変化についてである。

第一部では明と朝鮮の文人交遊と文学交流活動を主な対象として、当時の両国の文学交流活動の実態を考察することにした。両国文人の交遊活動に関して本論文で主に扱う時期は、日本との戦争が終結した1598年から光海君時代が終わる1623年までに限定した。本論文で特にこの時期に注目したのは、次のような歴史的背景からのことである。

1592年、突然の日本の侵略にあつて朝鮮政府は明朝廷に援軍派兵を要請することになり、その年12月には明から大規模な軍隊が朝鮮に派遣されることになった。明の援軍によって戦勢は逆転し、1593年には日本との講和交渉に入り、戦争は休戦を迎えた。しかし1597年には日本による二度目の侵略が行われ、明朝廷も再び軍隊を派遣した。その後、1598年に終戦となり、明軍は1600年までに順次に朝鮮から撤収することになったが、このように何年にもわたって朝鮮に滞留したり、二度にかけて朝鮮に派遣されたりすることによって、明将らとその下の明兵らは朝鮮生活に適応しながら、朝鮮の社会と文化にも関心を持つようになったのである。特に戦争終結後の1598年から1600年の間は、最も集中して朝鮮のことを学べる時期であった。このようなことから、本論文では1598年からの交流活動に注目したのである。

それ以降は、光海君時代(1608~1623)が幕を閉じた1623年の仁祖反正を下限線として扱っている。結果的に言えば、本論文で最も注目した時期は宣祖末期と光海君時代である。歴史的に見ると、この時期は200年余りにわたって安定を保っていた朝鮮の社会秩序が戦乱をきっかけに崩壊し、政治・経済的には非常な困難を迎えた時代であったといえる。しかしその一方で、文化と思想の面では、長年の社会的安定による硬直した雰囲気から脱皮し、新たな変化を模索できる時期でもあった。特に明との活発な交流を通じて入って来た新しい文化と思想は、朝鮮知識人たちに、従来の固着した学問態度から脱して多様な学派の理論に接する機会を与えたのである。

外交の面でも、光海君時代は明と後金の間で中立維持の政策をとった時期であつて、明との義理よりは現実的な状況に対応し、実利を取ろうとした時期であつた。このような現実的で理念に偏らない時代的气氛の中で、朝鮮文人たちも学問的にも文化的にも、最も開放的な姿を見せることができた。それは仁祖反正以降の朝鮮の知識人社会が、明との義理を強調し、性理学的秩序を強化するなど保守化していったのに比べると、かなりの相違として見ることができる。また中国との交流においても、仁祖反正以後、新たに成立した清朝を「夷の国」と見下して文化交流を拒否

したのに比べ、光海君時代の活発な中国との交流活動は非常に注目される。このような歴史的背景を考慮した上で、本論文では戦争が終わった 1598 年から仁祖反正が行われた 1623 年までの明と朝鮮の文学交流活動に着目したのである。

では、これから本論文の具体的な進行について説明する。まず、戦乱以降から 17 世紀前半までに行われた明と朝鮮の文人の交遊と、文学交流の具体的な様相について考察した。当時朝鮮文人が明文人と交遊できるのは、明使行と明使・明将の接伴活動が唯一の機会であった。第一部ではこの使行や接伴という外交活動を通じて行われた文学交流活動について考察したのである。

第一章では、明文人らの朝鮮訪問によって朝鮮文人が彼らとの交遊の機会を得た接伴活動について考察した。この時期の接伴活動は二つに分けることができる。一つは伝統的な接伴活動である明使接待活動、もう一つはこの時期の特別な事例である明将らへの接伴活動である。ただし、この章では明使接伴活動のみ考察し、明将への接伴に関しては第三部で扱うことにした。

使臣接伴活動については、17 世紀に入ってから 1602・1606・1609 年の三回にわたって明の文官出身使臣が派遣された歴史的事実に注目し、彼らの接伴中に行われた両国文人の交遊と情報交換について考察した。それを通じて両国の交流が一方向的な文化伝播や受容ではなく、相互の関心に基づいて双方向的に成り立っていたことを確認したのである。また接伴をきっかけに行われた両国文人たちの交流が、一回に止まらず、その後も数十年にわたって継続的に行われていたことを明らかにした。彼らの親交はそれ以降両国の外交問題解決にも大きな役目を果たし、彼らの文学交流を通じて両国文壇にそれぞれの作品が紹介されるなど、後世にもかなりの影響を与えたことが確認できた。

次に第二章では、17 世紀前半の朝鮮文人たちの明使行について考察し、中でも当代最高の文章家として認められていた李廷龜・許の明使行を扱った。この二人は当時の明との外交活動において、使臣・接伴官として最も活躍した人物であった。この章では文学交流に関係した彼らの代表的な明使行を選び、それを具体的に見てゆくことにした。

まず、当時明との外交活動で最もその能力が認められていた李廷龜の使行について考察した。彼はその文書作成能力と、明人との交遊関係を駆使して明との複雑な外交問題の解決に大活躍し、その能力によって政界で高位に昇った人物であった。また明使行期間中、明文人と詩文を取り交わしたり、自分の詩集を明文壇で出版したり、活発な文学活動を行ったのである。彼の事例を通じて、文学活動と外交活動がどのように連動していたのかを考察することができた。続いて許 の 1614・1615年の二度にわたる使行を取り上げ、彼が数千巻に及ぶ明の新刊書籍を購入したことについて見た。それを通じて、情報の流通に直結する書籍の輸入が、明使行と不可分の関係にあったことを確認したのである。

引き続き第二部では、以上の交流活動を通じて朝鮮文壇に入って来た明文学がどのような方式で受容されたのかについて検討した。特にその受容方式において、朝鮮文壇の批判的かつ独自の態度に注目しようとしたのである。具体的な方法としては、詩文選集の批判的理解と再編纂作業、文学論の受容に関わる事例を選んで、文学史の流れの中でその事例が持つ意味を探った。また必要に応じて18世紀江戸文壇の状況と対比し、両国の明文学受容状況の差異を視野に入れようとした。それにより、各国の文壇状況に応じて明文学受容がそれぞれ異なる様相を見せていたことを、さらに明確に捉えることができたのである。

まず、許 の漢詩批評作業を中心に、明代詩論、特に前後七子の詩論が朝鮮文人たちにどのように受容されたのかについて考察した。許 は歴代の中国詩選集を検討し、それを自分の基準によって再編纂する作業に熱意を見せた。ここではその作業の過程で示された彼の文学論に注目した。許 は当時明文壇で流行していた前後七子の文学理論を涉獵する中で、ある程度はその影響を受けながらも、同時に朝鮮文壇の伝統を受け継いで明の文学理論から一定の距離を置いていた。また漢詩批評においても、自分なりの基準を持つことの大切さを非常に強調していた。このような許 の事例を通じて、当時の朝鮮文人たちの明代文学論に対する批判的受容態度をうかがうことができた。

次に、17世紀前半の朝鮮文壇で中国の唐詩選集が流行し、ついには朝鮮文人によ

る独自の唐詩選集まで編纂された状況に注目し、中国の詩文選集が朝鮮にどのように受容されたのかについて考察した。ここでは許 と李 光の唐詩選集編纂作業を中心に、明代前後七子の盛唐詩尊崇の詩論に影響を受けながらも、朝鮮独自の唐詩評価基準が模索されていたことに注目したのである。このように批判的かつ独自の受容態度は、同じく前後七子の影響圏にあった江戸文人服部南郭が唐詩の学習書として李攀龍の『唐詩選』を選択し、以後 18 世紀江戸文壇で多様な形態の『唐詩選』和刻本が出版された事情と非常に対照的である。このような両国文壇における中国の唐詩選集受容、再編纂方式の相異点を分析することで、同一の書籍が各国の文学的環境において持つ特殊な意義について考察したのである。

最後に第三部では、第一部、第二部で考察した明との文学交流と明文学の批判的受容が、結果的に朝鮮漢詩への認識にどのような影響を与えたのかについて考察しようとした。それについては、まず朝鮮漢詩が明文壇に多数紹介されたこと、また朝鮮文壇で朝鮮漢詩整理作業が行われたことに注目したのである。

当時両国の活発な文学交流によって、明文壇に朝鮮漢詩が多数紹介された。特に 1598 年に戦争が終わってから、まだ朝鮮に滞在していた明将らの主導で歴代の朝鮮漢詩選集が何度も編纂された。この時期明文壇に紹介された朝鮮漢詩は、以後明清の詩選集編纂作業において「朝鮮」部分の重要な参考資料とされ、朝鮮漢詩を明文壇に知らしめる大きな役割を果たしたのである。この時、明文人らは「中華文明の一部」として朝鮮漢詩文を認識し、そのことは朝鮮文人たちに自国の文化への自負心を持たせる要因の一つにもなった。本論文では許 の朝鮮詩文紹介活動に注目して、自分の詩才を漢文学の本場に示そうとする朝鮮文人の積極性と、中華文明の周辺部への広がりに関心を持った明文人たちの好奇心があいまって、両国の文学交流が活発になっていたことを確認したのである。

ところが、急激な交流の拡大は朝鮮において歓迎されるばかりではなかった。朝鮮文人たちの積極的な詩文紹介活動は、その過程で明との外交的衝突が起きることを懸念した朝鮮政府により、制限を加えられることもあった。その一例として本論文では、1620 年に李廷龜が北京に行き、当地で自分の詩集を出版したために、朝鮮

の朝廷内で騒動が巻き起こった事件に注目した。このように明との交流の過程で起きた朝鮮政府との軋轢を通じて、当時の文化交流が順調に進んだだけではなかったという状況も確認できたのである。

次に、このような交流活動を通じて、17世紀前半の朝鮮文壇で漢詩評価に関する独自の基準が用意され、それに基づいて朝鮮漢詩を再評価しつつ、朝鮮漢詩選集と詩話集編纂作業が積極的に進められていった状況を考察した。それは明との文学交流が最終的に朝鮮漢詩の発達に与えた影響を論じることでもある。そしてこれによって明文壇との文学交流が、結局は朝鮮漢詩の再発見を生み出したという結論に至ったのである。

その具体的な事例として、戦乱後に政府事業として編纂された『海東詩賦選』、許 訥が個人的に編纂した詩選集『国朝詩刪』と詩話集編纂の経緯について考察した。これらの作業の過程で、朝鮮漢詩に対する新しい自覚が生み出され、朝鮮漢詩の価値が再認識されていったことに注目したのである。すなわち、中国の詩論を批判的に受容する中で朝鮮文人なりの独自の漢詩評価基準が形成され、それに基づいて朝鮮漢詩を評価した時、その水準が漢詩の長い伝統の中でも堂々たる一員の資格をもつという自負心を抱くようになった。そしてそのような認識に基づいて、中国の詩文だけではなく朝鮮の漢詩も本格的な「批評の対象」とされるようになったということである。

要約すると、本論文は16世紀末の戦争をきっかけに活発化した明と朝鮮の文学交流の実態を具体的に考察し、以降明文学が朝鮮文壇で批判的に受容された方式を分析し、そのような交流と受容を通じて朝鮮漢詩への認識が変化した過程を追跡しようとしたものである。それは一見個別の事件のように見える文化現象が、相互に緊密な関連をもっていることを明らかにしたものであり、外来文化の受容と朝鮮独自の伝統がどのように影響しあって、以後の文壇に新しいものを生み出していったのかを検証したものである。これはまた17世紀後半以降の朝鮮文壇に現れた個性追求の動きに、前時代の明文学受容、朝鮮漢詩の再発見が密接に関連していることを明らかにしたものであり、17世紀前半と17世紀後半以後の詩壇を相反するもの

として捉える先行研究の態度に対し、新しい観点を提示するものである。

氏 名	ろ 盧 きょん 京 ひ 姫
-----	--

(論文審査の結果の要旨)

中国という巨大で強力な文化圏の周辺にある国々は、それを受容しつついかに己れの文化を構築していったか、それぞれ複雑な様相を呈している。東アジア文化圏という言葉で一概に覆い尽くせるものではなく、固有の歴史、文化など様々な要因によって様々な様相を示すのである。

本論は朝鮮が明の文学をいかに受容し、それを通して朝鮮漢文学がどのように作りだされたか、その過程を明らかにしようとする。対象とする時期は17世紀最初の25年ほどに絞られる。それはこの期間が日本の侵略に対して明の援軍が大量に派遣されたのを機に明と朝鮮の相互理解が急速に深まり、またその前後の閉塞的な状況と異なって比較的自由に受容が進められた、交流の活発な時期に当たっているからである。

論者はまず明からの使節とその接待に当たった朝鮮文人との交流から筆を起す。明の使者として派遣されるのは概ね宦官がその任に当たったが、17世紀初めの時期だけは集中的に文人官僚が使者となって訪問している。対する朝鮮側も最高の文人をもってこれに応じた。そこに明と朝鮮の文人どうしの交わりが開花したのである。彼らは詩文を応酬することを通して互いに認め合い、そこには政治的用務を越えた、人と人との固い結びつきが生まれた。このようなかたちでの交流が可能であったのは、中国古来の文人相会する伝統が朝鮮文人の間にも共有され、共通する文化的基盤のもとに文人の交遊を享受できたからにほかならない。とりわけ明の朱之蕃、朝鮮の許、両者の交わりは細やかに叙述され、国の違いを超えて文人としての一体感が共有された様子がみごとに再現されている。

そうした個々の交遊を通して明の文学及び文学観が朝鮮に伝えられるのだが、しかしそれは無批判な受容ではなかったことを論者は強調する。明では前後七子の古文辞派——「文は秦漢、詩は盛唐」を唱道する文学観が続いていた時期にあたるが、それがそのままでは受け入れられなかったのである。ことに許は性情を根幹に据

えた独自の判断基準を重視し、その点では中国では古文辞派のあとに起こる袁宏道の詩観を先取りするかにさえ見られる。こうした批判的受容は、日本では荻生徂徠、服部南郭ら 園派がもっぱら古文辞派の詩観を唱えたのと対比的であることを論者は指摘する。もっともここには時期、階層など他の要素も考慮しなければならず、中国受容に関する朝鮮・日本の違いについては今後さらなる考察が必要だろう。

明の使節の受け入れのみならず、朝鮮から明へも文人が送られ、ことに李廷龜は外交活動に併せて文学においても詩文の応酬のみならず自分の詩集を出版するなど積極的な活動を展開したことを詳細に調べ上げている。どのような書物が朝鮮に将来されたかの調査も貴重な成果である。

こうした相互の往来のなかで論者が強く主張するのは、朝鮮文人が中国から詩文を学んだだけでなく、朝鮮の漢詩文も中国にも伝えられたという逆方向の現象が見られることである。これは従来の理解を覆す指摘であるが、近年発見された『朝鮮詩選』、許 の姉の詩集『蘭雪軒集』の刊行、またそれに関わる中国文人の言述など、数々の資料によって裏付けている。それが中国に大きなインパクトを与えるまでには至らなかったとしても、論者が言うとおりの、朝鮮詩文に対する中国の認識の変化を示すものであろう。

17世紀初頭は明・朝鮮の文化交流がはなはだ活発な時期であったことはこれまでも知られていたが、本論は交流の具体的な事実を初めて明らかに掘り起こし、直接の接触を通して両国の文人の認識が変化していく過程まで説き及んでいることは、中国・朝鮮文化交流史の研究に新たな知見を加えたものである。

その交流を探るうえで関わらざるをえない明の文学思潮、また朝鮮と同様に明から移入しながら別の過程をたどった江戸期の状況など、周辺の事象を考慮している点も先行研究を越える。それらについては、論者はその分野の研究成果を咀嚼して手際よく整理しているが、しかし自身の研究によって到達した見解ではないためにいささか表層的なきらいが否めない。もっとも明の文学思潮、ことに古文辞派の実態は現在、学界で捉えられているほど単純なものではないであろうし、江戸期の中国文学受容の様相も必ずしも十全に明らかにされているとは言い難い。いずれも大

きな問題であって、今すべてを要求することはできないが、論者の研究が今後そうした方面にも進み、それによってさらに広い視野から朝鮮と中国との交流に対する理解が深まることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年8月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。